



垂米利加 放浪記

【11】

windance



テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

サンプル版のダウンロードを誠にありがとうございます。

以下は本文よりの抜粋です。本文では、高校・大学・大学院と、日本とアメリカを行ったり来たりしながら合計4年をアメリカで過ごした windance のナマの体験をご紹介します。驚きと失敗、感動と挫折に満ちた冒険の数々に、請うご期待！

+++++

コンクリート・ジャングル

緑茂る広大なキャンパスをファッショナブルな男女学生たちが行き交い、サークル活動に青春を燃やし、学園祭の時には恋が芽生え、大学周辺のカフェでは活発に議論を戦わせる… そんな学生生活を想像していた僕は、ある重要な事実を見落としていた。この大学の理工学部は、メインキャンパスから30分以上離れた別の場所に存在するということだ。

文学部の講堂で行われた入学式が終わったあと、30分歩いて理工学部のキャンパスに到着した僕は、雰囲気の違いに愕然とした。

「コンクリート・ジャングル」と嘲笑されるそのキャンパスは、コンクリートむき出しの安っぽい建築で、工業高校と変わらない印象だ。芝生はおろか樹木すらも皆無に等しく、学生は真っ暗な研究室で、サムい冗談を言い合いながらニヤニヤしている。オタクの城だ。クライ、キモい、サムい、なんてCMでも作れそうだ。

しかも、そのコンクリートのキャンパスには男しかいない。通り向かいには女子短期大学があるが、男性は中には入れてもらえないし、「あの大学の男の子とだけは付き合わないように」と強く言われているそうだ。

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

学生生活の最大の楽しみである学園祭の期間は、「理工展」と呼ばれるイベントを同時開催する。

いわゆる研究発表会だが、そんなのは学会でやれ！と言いたくなる。

案の定、大学での講義は退屈を極めた。

まず、よほどの変人でもない限り、こんなにたくさんの成人間近の男たちが、ひとつの部屋に集まっていること自体、心地よく思うわけがない。

必修の実験では、メーターの数値を読んではノートに書き写す作業が続き、夜にはそれをもとに意味のないレポートを書かなければならなかった。

教授の著作による大小さまざまな専門書を買わされるが、中身は禅問答のように難解そのもの、全くの抽象論ばかりだった。

国際学部の交換留学制度

得るものは何もない、と感じた僕は、国際学部の留学制度に応募した。

この大学では、米国五大湖周辺の5つの大学と提携関係にあって、互いに留学生を受け入れ合ったり単位の交換ができるような制度があった。アメリカの学生を毎年数名受け入れる代わりに、日本からも若干名、これらの大学に送り込む。

試験が大好きな僕は、さっそくこれに応募して、パスした。

日本で4年間、退屈な大学生活を送るかわりに、そのうちの1年をアメリカで過ごすことができるというわけだ。アメリカで取得した単位を日本の大学に変換すれば、全く留年しなくて済む。

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

授業料と渡航費は国際学部で負担してくれるので、僕の負担は生活費だけということになる。物価の高い東京で過ごすよりも遥かに安上がりで、全寮制で密度の高い効率的な大学生活をエンジョイできる！

僕が選んだ大学は、ミシガン州にある学生数1300人ぐらいの小さなカレッジだった。授業料が高いため、比較的裕福な家庭に育った優秀な学生が多いとの評判だった。どうせ行くなら、ハーバードやスタンフォード、せめてアイビーリーグのどれかに…などとも考えたが、国際部の提携先には入っていない。自費で行くには学費が高すぎるし奨学金に応募するのも大変だ…

小さい大学でもレベルが高ければ育ちのいい学生が多いはずで、家族的な雰囲気も悪くないだろうと、僕は期待に胸を膨らませた。

***** 中 略 *****

アメリカの学生生活

学費は親から借り、就職後に少しずつ返済するという学生は多い。

全寮制の大学なので、生活費は学費と一緒に毎年払う。ただし、本や文具品、交際費などは自分で何とかしないと行かないので、キャンパスにはアルバイトの機会が溢れている。決して待遇は良くないが、勉強と両立できるのが魅力だ。

従って学生はよく勉強し、無駄なことには一切お金を使わない。悪く言えば貧乏でケチ、よく言えば金銭感覚が成熟している。

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

美人は少ないものの、男女比はほぼ半々で、キャンパスのあちこちで映画やコンサートなどが開かれる。モンテカルロ・ナイトと呼ばれるカジノ大会や、ハロウィーン・パーティーなど、2ヶ月に一度は教授陣も巻き込んだ大学全体のお祭り騒ぎがある。小さな大学ならではの、家族的サービスだ。

学生数 vs 教師数は12対1で、これはかなりいい数字と言える。キャンパス内の規律も厳しく箱庭のような環境なので、ひねくれた学生はおらず、皆前向きで、お行儀がいい。

日本での、悪臭を放つオタク達がうようよしていた退屈なキャンパスと比較すると、ここはまさに天国だった。

当然、僕も勉強に身が入った。面積分、ベクトル解析、電磁気学など、日本ではちんぷんかんぷんだった概念が驚くほど簡単に理解でき、面白かった。それには多分に、アメリカの教育法が関与している。

オープンでコミュニケーションを大切にするアメリカでは、標準化、体系化、マニュアル化、ドキュメンテーション、プレゼンテーション、など、意思疎通を効率良く行うトレーニングを幼い頃から積んでいる。「人に解らせる」「人を説得する」というのは大切な能力なのだ。

これは以心伝心を暗黙の了解として美化してしまう日本文化と大きく異なる。

日本の「もの言えは唇寒し」は、アメリカでは「黙っているのは無能の証拠」と、対極である。アメリカがコンピュータの分野で常に世界をリードし続けるのも、ここに理由がある。

***** 中 略 *****

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

Expository Prose の授業

ある日、Expository Prose の担当教授だったスタビグ教授は、厳粛な顔で教壇に立ち、こう言った。

「昨日のテスト結果を発表するにあたり、とてもショッキングな事実をお伝えしたい。米国学生に母国語である英語を教えている教授として、大変恥ずかしい。今回のテストで最高点をマークしたのは、驚くことに東洋の全く異なる言語圏において、外国語として英語を勉強してきたこの青年だ…」

それを聞きながら、普段は挑発的な口調でペラペラ喋り捲っていた女の子たちが苦笑いしていたのが印象的だった。

このクラスでは、週に3回、レターサイズの用紙に数枚程度の散文を書いて提出することが課せられた。

僕の戦略は単純だった。文法には自信があったが語彙に不安が残る。普通の文章を書いては注目されないし、理論的な文章も米国人にはかなわないだろう。内容で勝負だ。

そこで、実家で読んでいた朝日新聞の天声人語の記事をヒントに主題を固めることにした。記憶に残っているフレーズを頼りに、内容を自己流に膨らませて意味付けするのだ。

この戦略は大当たりした。

スタビグ教授は僕の英作文力を褒め称え、「君は外国人としては異例な英語表現力がある」などとコメントしてくれた。彼は提出された散文を自宅で添削する際に、

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

毎回僕の散文を奥さんに読ませては(なぜか)自慢していたそうだ。

僕自身、詩的な表現になるように語彙を選び、発音した時のフレーズのリズムや韻などにも気を遣ったので、なかなかの名作が多かったように思う。

探せば紙で残っているものが見つかるはずなので、機会があったらここに転載できるかもしれない。とりあえずは思い出すままにいくつか例をあげよう。

***** 中 略 *****

山頂アタック

足元に集中し過ぎ、呼吸が荒くなった時にはペースを落とすのが必要だ。あたりを見回すと、快晴の空に白い雲が幾重にも重なり、山の斜面と40度近い角度をつくっている。いつしか足元は急斜面の氷の壁となっており、踏み外したら命は無い。ロープでお互いを結び合っているとは言え、誰か一人でも滑落したら、全員がその巻き添えになることは十分にあり得る。僕たちは声を掛け合いながら、ひとつひとつの動作に全神経を集中した。

そうやって数時間歩き続けて、やっと火口に到着した。

火口近辺は若干斜度が緩くなるのでそれまでの緊張感が解れたが、そこには異様な風景が繰り広げられていた。ぽっかりと口を開けた火口の周辺は、雪面が途切れ崖のように落ち込み、まるで蟻地獄のような不気味な様相を呈していた。火口内の数箇所からうっすらと立ちのぼる蒸気に混ざって硫黄の匂いがし、生贄の肉と骨を焼きつくす準備をしているように見えた。

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

僕たちはその周りを半周するかのようには歩きつづけ、ついに一番高いポイントに到達した。5450メートルの制覇だ！

***** 中 略 *****

ヒッチハイク

バイオレンスの国アメリカでヒッチハイクをするとは、なんとも無謀な話だが、それしか選択肢はなかった。乗車の際には全身の感覚を総動員し、悪質なドライバーでないかどうかを判断した。高校時代にも1年間アメリカで過ごした僕は、このあたりの鼻がきいた。

ヒッチハイクに起因した多くの事件が報告されてから、誰もがヒッチハイカーに警戒心を抱くようになった。そんな時代でも、ハイウェイの入り口で3時間ほど待てば誰か停まってくれたのは、アメリカの国旗をあしらったアルミ製のバックパックが僕の愛国精神を表現していたからかも知れない。

もうひとつの要因は、とても拳銃を隠しているようには見えない痩せ型で温和な僕の風貌だったと思う。(ドライバーの母性本能をくすぐった?)

逆に、一見親切そうなドライバーから身包み剥がれる恐れもあったが、僕は何一つ金目のものを持ち合わせているようには見えなかったし、事実そうだった。ジャケットを着てメガネをかけ、カメラをぶら下げていれば格好のターゲットとなるが、僕の風貌は全くその対極にあったからだ。

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

アメリカン・スピリット

僕は実に幸運だった。危険な目に遭うこともなく、素晴らしい人々と出会い、助け合いながら逞しく生きていくことを生活習慣として身に付けたアメリカン・スピリットを体験した。

一路、南へ・・・ カリフォルニアの恵まれた気候の中を、様々なクラスの人々と会話を楽しみながら、僕はヒッチハイクを続けた。

友人達と再び合流したサンタバーバラでは、僕を車に乗せてくれた青年が、両親の所有だという広大なリゾート・アパートに全員を泊めてくれた。スペイン風の建築が見え隠れする丘のすぐ横にヤシの木をたたえた美しい海岸が広がり、ビーチバレーを楽しむ若者たちの姿が夕日に映える情景は、今も目の奥に焼きついている。

+++++

是非、本文をお読み頂ければ幸甚です。 アメリカン・スピリットに乾杯！

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。

亜米利加放浪記【Ⅰ】高校留学編（PDF 46ページ）は完全無料！

「クララの米口語塾」の無料体験配信にご登録いただくと、亜米利加放浪記【Ⅰ】（高校留学編）の本編のダウンロード URL をお知らせいたします。

- [無料体験配信ご登録 ⇒ http://ezamerican.com/rec/try_tz.html](http://ezamerican.com/rec/try_tz.html)

配信登録はいつでも変更または解除可能ですので、お気軽にお申し込み下さい。

教材をご購入いただくと、以下の続編【Ⅱ】および【Ⅲ】もおつけいたします。

- [亜米利加放浪記【Ⅱ】大学留学編（PDF ファイル 69ページ）](#)
- [亜米利加放浪記【Ⅲ】大学院留学編（PDF ファイル 60ページ）](#)

テキストの一部または全部につき、転載、複製、転売などのあらゆる流用を禁じます。